

椿三十郎

2007(平成19)年10月25日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★★



監督＝森田芳光／原作＝山本周五郎『日日平安』（ハルキ文庫刊）／脚本＝菊島隆三、小国英雄、黒澤明／出演＝織田裕二／豊川悦司／松山ケンイチ／風間杜夫／西岡徳馬／小林稔侍／中村玉緒／藤田まこと／鈴木杏／村川絵梨／佐々木蔵之介（東宝配給／2007年日本映画／119分）

……森田芳光監督が織田裕二を起用して挑んだ45年ぶりの『椿三十郎』のリメイク版は、黒澤・三船版との相対的評価ではなく絶対的評価として上出来！ また織田裕二の演技は見事だが、トヨエツとケンイチはイマイチ……？ それにしても、すばらしい脚本は半世紀近く経てもイキイキと息づくものだと痛感！ 県政の刷新を求める若者たちとそれを応援するアウトサイダーというテーマは、原作当時よりむしろ今の時代の方がピッタリ。そこで私としては、偽装と汚職だらけの昨今のご時世、この映画を観た若者たちの政治的反応（立ち上がり）を大いに期待したいものだが……。

■ 相対評価ではなく、絶対評価で……

森田芳光監督が織田裕二主演で『椿三十郎』をリメイクしているというニュースを私をはじめて知ったのは、『キネマ旬報』の2006年12月上旬特別号を読んだ時。毎回楽しみに読んでいる「日本映画製作情報」のページには、「森田芳光監督最新作『椿三十郎』撮影快調！」というタイトルで、クランクアップ直前の11月12日、東宝スタジオで行われた製作報告会見の様子が報告されていた。そして織田裕二＝椿三十郎の勇姿が表紙を飾ったのが翌2007年1月上旬特別号。それらを読んで私は思わず「えー、ウソー！」と思ったもの。

私は「世界のキタノ」こと北野武監督をあまり高く評価していないが、「世界のクロサワ」こと黒澤明監督はやはり絶対的な存在。『影武者』（80年）や『赤ひげ』（65年）、『椿三十郎』（62年）、『蜘蛛巣城』（57年）等はもとより、大学時代に松山の実家

に戻った時に観た『姿三四郎』（43年）や『虎の尾を踏む男達』（45年）、『わが青春に悔なし』（46年）などの昔の作品にも感激したもの。黒澤明・三船敏郎コンビの最高傑作を1つ挙げると言われると、そりゃ『七人の侍』（54年）だろうが、ここでの三船は道化師的な役であったうえ、何ととっても志村喬の堂々とした姿がカッコ良かったから、これは大勢の俳優でつくりあげた名作。しかし、三船の『椿三十郎』（62年）はまさに三船の独壇場で、三船の主演なしには成り立たなかったもの。

そんな黒澤・三船コンビの最高傑作の1つのリメイクに、45年後の今森田・織田コンビで挑んだのだが、黒澤作品が強く印象に残っている私を含め、多くの観客はやはり「それは、ちょっと……」と思うのは当然。黒澤作品より森田作品の方がすばらしいと言う人はまずいないのでは……？ しかし、そのように黒澤作品と相対的に森田作品を評価するのは少しかわいそう。そりゃ言ってみれば、合格者1800名時代の今ドキの司法修習生と、合格者500名時代の私たちの時代の司法修習生を比べて、今ドキの司法修習生は、と言うのと同じ……？

つまり、今回の森田作品を評価するにあたっては、まず黒澤作品のイメージを捨て、この作品だけの絶対的評価をすることが大切……。

若侍ではなく、バカ侍

映画の冒頭、山の中に身を潜めながら、とある社殿に迫る無数の侍たちの姿が映し出される。他方、社殿の中で激論を交わしているのは、井坂伊織（松山ケンイチ）を中心とする9人の若侍たち。井坂の報告によれば、汚職の張本人である次席家老黒藤（小林稔侍）と国許用人竹林（風間杜夫）の肅清を求める意見書を、伯父である城代家老の睦田（藤田まこと）に提出したのだが、睦田はこれを全く取り合わなかったのに対し、大目付の菊井（西岡徳馬）はこの意見書に理解を示し、詳しい話を聞きたいから、仲間みんなが集まっているところでじっくりと話をしたいと言われたとのこと。

昔の侍の言葉遣いと表現力はそりゃたしかなもの、その報告は実にイキイキとしており立派なもの。しかし、こんな井坂からの報告を身を乗りだして聞いている8名の若侍たちは、顔つきは必死でひたむきな姿勢はうかがえるものの、あまり頭が良さそうでないことは一目瞭然……？ まあ、若いからということもあるのだろうが、これほど単純に何でも信用し、人の発言の本音部分と建前部分あるいは発言のウラに隠されている真実を読みとろうとしないのでは、若侍ではなく、バカ侍……？ そして

それは、この冒頭のシーンのみならず、その後の9人の話し合いにおいても全く同じ。

こんな若侍たちの姿を見ていると、つい私は本職の方をふり返り、2009年5月までに実施される裁判員制度の運用が心配になってくる。つまり、何ごととも単純に信じ込み、1人が右だと言えばみんなそうだそうだとなってしまう、このバカ侍のような日本人が裁判員に選任されると、ちょっと恐いと私は思っているのだが……。

テーマはむしろ、今の時代の方がピッタリ……

この映画の1つのテーマは地方分権が徹底されていた幕藩体制の時代における、とある藩での汚職の糾弾。つまり今風に言えば、ある県の序列第2位の副知事（次席家老）と県警本部長（大目付）らが結託して、私利私欲を肥やしているということだ。

去る10月15日から21日まで開催された中国共産党の第17回大会に向けて、上海閩を中心とした各地方の共産党と政府の幹部による汚職が徹底的に（？）解明され処罰されてきたが、中国でそんな問題が発生するとは、黒澤作品が作られた1962年当時は、想像もできなかったこと。また日本でも、1962年当時は高度経済成長政策が軌道に乗る前であり、日本列島至るところに蔓延している、昨今のような自治体の腐敗、汚職という構造的な問題は発生していなかった時代。

そういう意味では、ちょっと頭は悪いが正義感に満ちあふれた若者たちが、県政の刷新を求めて命を懸けて県幹部の汚職を追及するというテーマは、黒澤作品がつくられた1962年当時より、2007年の今の時代の方がむしろピッタリ……。

やっぱり映画は脚本が命……

山田芳光監督のリメイク版『椿三十郎』は、原作を忠実に生かしたのが最大の特徴。そしてそれが、黒澤作品と比較されるのはやむをえないとしても、森田リメイク版を現代の若者たちが面白く観ることができるであろうところが最大の特長。その理由は、やっぱりこの映画の脚本がしっかりしているから。

山本周五郎の原作『日日平安』を土台としながら、練りに練られたストーリー構成とお笑いの要素を含む特徴的な登場人物のキャラはやはり出色。次席家老黒藤、大目付菊井、国許用人竹林の三悪人たちのキャラはキワ立っているし、陸田夫人（中村玉緒）とその娘千鳥（鈴木杏）の天然ボケぶり、そして9人のバカ侍たちよりよほど利口だと思わせる、「押入れ侍」の木村（佐々木蔵之介）など、面白い登場人物たちは

それぞれのシーンできっちりとその役割を……。

あたかもこれは、今年のセリーグのクライマックスシリーズで読売巨人軍を三タテで破った落合中日と同じで、監督の指揮下、個性的なプレイヤーたちがそれぞれきっちりと自分の役割を果たしているということ。おっと忘れていた、監禁された城代家老の腰元こいそ（村川絵梨）のちょっとコミカルな演技にも注目！ さらにスケベ親父の視点からは、織田裕二が『T.R.Y.』（02年）（『シネマルームⅡ』217頁参照）でみせた、天才詐欺師まがいの口八丁手八丁のベテンをくり広げる椿三十郎の食事を世話する3人の美女たちにも注目だ……。やはり、映画は脚本が命だということを痛感……。

トヨエツとケンイチはイマイチ……？

この映画を観るについて、私は何よりも織田裕二演じる椿三十郎を、三船敏郎と比べてどんなイメージで受け入れることができるか心配していたのだが、その不安は冒頭の社殿のシーンで完全に払拭された。さすが演技力抜群の織田裕二だけあって、その役づくりはほぼ完璧。

それに対して、冒頭からラストまでずっと登場する若侍井坂を演ずる松山ケンイチはイマイチ……？ やっぱりケンイチは『DEATH NOTE（デスノート）（前編）』（06年）、『DEATH NOTE（デスノート） the Last name』（06年）のL（エル）が1番ピタリするキャラであり、『蒼き狼 地果て海尽きるまで』（07年）のジュチ役と同じように、『椿三十郎』での井坂役は、そもそもチョンマゲ姿が全然似合わない……。せいぜい私が共感できるケンイチの役は、『男たちの大和／YAMATO』（05年）での特別年少兵神尾克己の役まで……？

また織田裕二と並ぶ演技派であるトヨエツこと豊川悦司は、冒頭で椿三十郎を見た時から彼の剣の腕を見抜き仕官を勧める、宿命のライバルとなる室戸半兵衛役を演じている。当然トヨエツの役づくりも徹底したもので、それなりの味わいを出しているが、私の目にはやはりイマイチ。むしろ9月20日に観た『犯人に告ぐ』（07年）のトヨエツの方が適役だと思ったのは、やはり彼も時代劇に馴れていないせい……？

まあ、ここらの評価はあくまで私の独断と偏見によるものだから聞き流してもらった方がいいのだが、さてあなたのご意見は……？

プレスシートの「用語集」を読んで唖然……

今年も10月から新人弁護士が各弁護士会に多数登録し、新戦力としてさまざまな活動を開始している。そんな中、目立つのが新人弁護士向けの研修として送られてくるFAXの数々。それをみると、曰く「話しかたを学びましょう」、曰く「確定申告のやり方を勉強しましょう」。しかしこれって、私たちが大学に入学した時、いろいろなサークルから勧誘してきた時の呼びかけと同じでは……？ しかしそれは、私が18歳の時の話。晴れて弁護士バッチをつけた新人弁護士の平均年齢は28～9歳のはず。これって、日本全体に進んでいる幼稚化のあらわれでは……？

そんな風に思っている私が驚いたのは、この映画のプレスシートにある『椿三十郎』をもっと楽しむための時代劇用語集』を読んだ時。たしかにこの映画の中では、①城代家老、次席家老、大目付、腰元などの役職名、②岡目八目、旅籠賃、おっとり刀、抜き身、奸物、高札、首魁、寄せ手、禄など、あの時代特有の概念をもった言葉、そして③推挙する、詮議する、詰腹を切らせる、などの動詞類がたくさん登場するが、プレスシートではそれを見開き2頁を使って大特集。

ここで笑わせるのは、首魁、血判はまだしも、大名や任官、浪人まで、懇切丁寧に『広辞苑』を参考にして解説していること。こりゃ一体ナニ……？ ここまで今ドキの日本人（若者）の国語力は低下しているの……？

日本の時代劇の名作をアメリカや中国向けにリメイクするのであれば、ここまでの解説が必要だろうが、私が住んでいる国はまだ日本国のはず。しかるに、ここまで懇切丁寧に日本語の解説をしなければこの時代劇の良さがわからないのかと思うと、唖然とする他ない。もっとも、このように心配するのは現在の日本国の実情を真摯に見つめれば仕方がないのかもしれないが、今年新たにバッチをつけた新人弁護士と同じように、ここまで日本の若者たちを過保護にすることは、かえって新人弁護士や映画ファンの若者をダメにしてしまうのでは……？

物事には表とウラが……？ 人間の器量とは……？

この映画（の脚本）が面白いのは、物事には表とウラがあること、また人間の器量についていろいろと教えてくれること。つまり、固定観念のない、曇りのない目で客観的かつ冷静に判定しなければダメだということを、椿三十郎の視点と分析を通じて

教えてくれること。あまりにもうますぎる話はヤバイ、そこには策略がある。すなわち物事にはすべて表とウラがあるということだ。

また、やけに調子よく話に乗ってくる大目付菊井のようなキレ者は逆に怪しく、藤田まこと演ずる城代家老睦田のように、顔つきも馬ツラ（？）で話すことも少しとぼけている男の方が意外に真実を見抜いているということ。つまり人間の器量とはそんなものというわけだ。

少し前にはライブドアのホリエモンこと堀江貴文、直近ではボクシングの亀田ファミリーのように、マスコミの煽動に振り回されるまま日本国民の多くが熱狂したり、逆に罵倒したりする昨今のご時世をみるにつけ、この映画で椿三十郎が9人の若侍（バカ侍？）たちに示している教訓を、私たちはしっかり理解する必要があるのでは……？

時代劇の見どころは殺陣……

今年の日映画界はキムタクこと木村拓哉の『HERO』（07年）で沸いているが、山田洋次監督の「時代劇3部作」のラストを飾った『武士の一分（いちぶん）』（06年）もキムタクの演技が話題となって大ヒットしたもの。『武士の一分（いちぶん）』におけるキムタクの殺陣は、盲目というハンディキャップがあったため多少変わったスタイルにならざるをえなかった（『シネマルーム14』318頁参照）が、時代劇の見どころが殺陣（の工夫）にあることは言うまでもない。その点私は、『隠し剣 鬼の爪』（04年）はあまり評価せず（『シネマルーム6』188頁参照）、『たそがれ清兵衛』（02年）での真田広之の殺陣を高く評価している（『シネマルームII』68頁参照）が、さて『椿三十郎』は……？

『椿三十郎』での殺陣の見どころは2カ所ある。第1は、21人斬りのシーン。中村錦之助が『宮本武蔵 一乗寺の決斗』（64年）において、吉岡一門70名に対して無意識のうちに左右の手に二刀を握って挑んでいった鬼のような殺陣はそりゃ迫力があつたが、織田裕二が演ずる21人斬りの迫力は……？ テレビドラマでは、何人斬っても息ひとつ乱れず平然と血のついた刀を拭きとっているシーンがよく登場するが、リアルさを売りものとする映画ではそうはいかない。そこにはどんな工夫が……？

他方、もちろんこの映画のクライマックスは、ラストシーンにおける椿三十郎と室戸半兵衛の対決。多少の（？）行き違いのためそれまで敵対してきたものの、お互い

浪人者、つまり権力争いの当事者ではない第三者同士が斬り合いをしてもつまらないと椿三十郎がさかんに室戸半兵衛を説得したのは当然。もちろん室戸半兵衛もそのことは十分理解しているのだが、我慢できないのはプライドが傷つけられたこと。

そんな和解交渉が決裂した後、「なれば、仕方なし」となって2人は向き合うのだが、さてそのクライマックスでの殺陣の工夫は……？ それは映画を観てのお楽しみ。

ここであえてくり返しておくが、くれぐれも黒澤・三船版との比較対照だけはしないように……。

2007(平成19)年10月26日記

ミニコラム

ロシアの「双頭体制」の行方は？

『椿三十郎』はある意味で人間の「器量」を考えさせる映画だったが、ロシアでは08年3月2日の大統領選挙で第1副首相から大統領に「当選」したメドベージェフ氏の器量が今後問われることに。エリツィンの後を引き継いだ2代目大統領プーチンは、豊富な石油と天然ガス資源を最大限活用した外交によって「強いロシア」を復活させた。しかし、99年のアパート爆破事件を契機として、「テロリスト掃討」名目で第2次チェチェン戦争を命じたのはプーチンで、その権力基盤が「シロビキ」と呼ばれる治安情報機関にあることは明らかだ。また、「爆破テロはFSB（ロシア連邦保安局）の工作だ」と驚くべき告白をした元FSB中佐リトビネンコが、06年11月ロンドンのバーで放射性物質ポロニウム210を

飲まされ暗殺された事件についてプーチンが「説明責任」を果たしていないことも、『暗殺リトビネンコ事件』(07年)を観れば明らかだ。

そんな権力者だけに、憲法を改正して3期目を目指すとの説もあったが、現実にはナンバー2の権力者＝首相としてメ大統領を支えるという選択をした。しかし、その実態は？

「両雄並び立たず」は古今東西、昔から共通の鉄則。さらに、メ大統領は民主主義や市場経済を志向するリベラル派とされるだけに、その独自色を打ち出せば、近い将来シロビキをバックとしたプーチン首相との対立は必至？ アメリカの次期大統領の決定は09年1月だが、少なくともそれまでのロシアの双頭体制の行方に注目したい。

2008（平成20）年3月6日